

あぱっさ

ワウ語で Vol. 21 地の精霊

特定非営利活動法人
熱帯森林保護団体
Rainforest Foundation Japan
〒154-0012 東京都世田谷区駒沢1-8-20
TEL : 03-5481-1912 FAX : 03-5481-1913
xingu@rainforestjp.com www.rainforestjp.com

HOW TO HELP

＜年会費＞大人：¥5,000 18歳未満：¥3,000

・郵便振替 00140-3-144187 熱帯森林保護団体

・三井住友銀行 東京中央支店
(普)7066247 熱帯森林保護団体

* 銀行からお振込の方は、
お名前とご連絡先を別途必ず当団体までお知らせください。

「2017年を振り返って」

南 研子

2017年ももうすぐ終わろうとしています。今年4月に当団体運営資金が底をつき危機的な状況に陥りましたが、多くの方々の暖かい応援金でアマゾン支援を続けていけますようになり、本当に感謝いたしております。

2件の支援事業（養蜂事業、消防団事業）は確実に進展し、現地住民インディオの次世代が主体性を持って、力強く未来に向けて森を守る活動をしている姿に希望の光を見出せます。アマゾンの現状はブラジル社会において、劣悪な状況ではありますが、諦めずに支援活動のプロセスに全力を注ぎ、結果を恐れず精進して参ります。現在、世界中の国々は、未だかつてないほど良し悪しきは別として、大きな変化の時を迎え、まかり間違えば人類絶滅の危機に向かうかもしれません。地球の資源は有限で、自然の摂理に逆らい、経済優先で全てをねじ伏せたところで良い結果になるとは思いません。自然との共生などもってのほか、自然への服従しかありません。巷ではAI導入やスマートフォン、パソコン等が蔓延し、人間の想像力を欠如させ、ボーとすることも儘ならぬほど安易に情報を得ることができ、一見とても便利に見えますが、果たしてこれが幸せなのでしょうか？余程の強い意志を持っている人でない限り、機械に支配されそうな気がします。ジャングル暮らしは、用足しするものトイレがないので不便ですが、周りの景色や空気の匂いを実感する余裕があります。生きとし生けるものの命の尊厳を教えてくださいカヤボ族長老ラオーニの「森が無くなればインディオは死ぬ、でもお前たちも生きていけなくなる」という言葉を胸に修め、これからも地道にインディオの人たち、目には見えないけど確実に存在する森の精霊さんたちに寄り添い、アマゾンの自然が1日でも長く残りますように精一杯、支援活動을続けて参ります。今年も本当にご支援頂き、ありがとうございました。来年も何卒、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。



photos : Satomi Shimogo

写真左上：イアラピチの家族と代表南と下郷
左下：真剣な眼差しで聞く、消防団のメンバー
上：マチブ族の子ども達

「出会いからつながりへ」

熱帯森林保護団体ひろしま代表 松岡 敏子



地震後のナチュラルコーヒー新店舗

熊本地震から復興されたナチュラルコーヒーを先日訪ねた。

新店舗オープン数日前にテナントビルが全壊したが、この4月に新たな店舗をオープンされたのだった。私たちとナチュラルコーヒーの出会いとは2008年ミーティングの最中、頭を抱えていたときに皆で飲んでいたコーヒーがナチュラルコーヒーだった。そのやさしい味にホッしながら、このコーヒーを私たちで売らせてもらって利益をアマゾンの支援金にあててはどうか？すぐに熊本を訪ね清田社長にお願いをしたら「そういうことが大事だから是非おやりなさい」と逆に背中を押してもらった。

余震が続くなか、いち早くテントを張り、行き交う被災された方々やボランティアの方々に無償でコーヒーを提供された。その1杯のコーヒーがどれほど人を癒したことだろうか・・・そしてその人と人との温かい繋がりは今も続いていると聞いた。ちょうど訪ねた日は大雨だったが、

常連らしき年配の男性や外国人の連れ、女性客など店内は賑わい、どの人も笑顔であった。

私たちの小さな活動が、アマゾンと日本・・・広島・熊本・・・と繋げているのかな～。そんな想いがふと湧き上がり、なんだか私は嬉しくなった。アマゾンは遠い、だけど皆と繋がっている。地球の酸素の4分の1を産み出すアマゾンの森は、確実に自分と繋がっている。だって人間は酸素なしでは5分も生きられないのだから・・・

降りしきる雨の風景を眺め、居心地のよい空間で美味しいコーヒーを味わいながらアマゾンの活動が続けてきて、本当に良かったと思った。いつもアマゾンコーヒーをお買い上げ頂きありがとうございます。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

「二つの世界を行き来する扉」

熱帯森林保護団体にいがた代表 遠藤 真理

年に数回研子さんが新潟を訪れ、ごくごく親しい方々と「大人の不思議なお伽噺夜会」がもてるのを心待ちにしています。お話を聞いていると、アマゾンの原野に生い茂る密林、音をたてて沈みゆく太陽、そこに暮らす生命力溢れる昆虫や動物たち、そしてカヤボ族の大地に根を張った暮らしが圧倒的な現実として迫ってきます。その時間はまるで、研子さんの語りから地上で特別濃い空気を呼吸しているようです。

現在日本では経済連携協定(EPA)に基づき外国人看護師の受け入れを行っていますが、先日インドネシアからの二人の看護実習生に日本語を教えているときのことでした。実習生の一人の母親が危篤になり、彼女はインドネシアへ里帰りしました。一月以上を経て、再び資格取得のため日本へ戻ってきたレッスンは延命医療技術と死がテーマでした。最も大切な人の死を目の前で体験してきた彼女は、質問に言葉を継ぐことができず静かに涙を拭きました。彼女たちが受ける国家試験の問題はありとあらゆる分野から出題されます。そんな模擬試験の問いの一つにがん患者の心の内を問う出題がありました。それは精神科医キューブラー・ロスが見出した死の受容過程に関するものです。人は死にゆく過程で、否認、怒り、取引、うつ、受容の5段階を経ると言われています。彼女の態度を通して、それは死にゆく人だけではなく、看取る人も同様ののだと感じました。

最重要であるにもかかわらず、現代に欠けているこの世とあの世をつなぐ不思議な扉。触れてはいけない禁忌のように扱われる「死者の世界」とは？「死者」との交わりとは？残された者と死者はいつ出会えるのか？それらの問いは死生学、ターミナルケアとしてやっと門前に立ったばかりです。扉があることによりやく気付いたのです。

けれど、研子さんから伝わってくるアマゾンの人々の二つの世界はいとも容易に行き来ができるように扉は開け放たれているように思えます。精霊が飛び交い、その言葉を聴き、現実には活かし、共に暮らす。生者と死者がコンタクトを取るのには自然に行われ、疑うこともありません。現代がアマゾンをもっと必要としている理由の一つもそこにあるような気がします。

今回は2ヶ所の支部代表からのメッセージです。
広島のいがたさんは十数年にわたり、熱い想いでアマゾンへはせようとし、真理さんは深い愛でアマゾンを見守り、下郷さん



30年来協力して頂いているMWアトランティスファクトリーとのコラボ製品、カヤボ族のボディペインティング布、Tシャツ等息長く販売していきます。来年は皮の素材を使った製品も考案中。アマゾンをご一緒に感じて頂けたら嬉しいです。

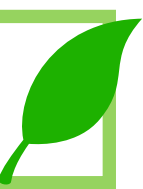
広島日伯協会名誉会長であると同時に、シンコー株式会社の元社長筒井数三さんが、98才でお亡くなりになりました。2007年2014年とラオーニ来広に際しては多大なる御支援、御協力をいただきましたこと感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



アマゾン 最新情報

「アマゾンのいま」をお届けします！

下郷さとみ（フリージャーナリスト）



■ラオーニがCOP23に参加。世界に向けてアマゾンの森の保護を訴えました

11月6日から17日にかけてドイツのボンで開かれたCOP23（国連気候変動枠組み条約第23回締約国会議）にカヤポ民族の大長老ラオーニが招かれ、アマゾンの森の保護を世界に向けて訴えました。

COPは地球温暖化防止を目的に、二酸化炭素などの排出規制について各国間で議論・調整するための会議です。ラオーニが出席したのは本会議に並行して開かれた「アマゾン・ボン会議」でした。ここではアマゾンの



写真右下 シンガー先住民族公園
周辺の大農場。収穫後の乾季の
農地はまるで砂漠のようだ



写真左・右上 ドイツのボンで開かれた
COP23の並行会議「アマゾン・ボン」
に招かれて演説するカヤポ民族大長老
ラオーニ（photo: IPAM）



破壊を食い止めて、持続可能な発展を促すにはどのような取り組みが必要かを、各国政府やNGOの代表らにが議論しました。

アマゾン先住民族の代表として招かれたラオーニは、大勢の人を前にこう訴えました。「森を子々孫々に残していくには、世界がひとつになって力を合わせなければならない。あなたたちは、森を破壊しているのはあなたたちだということを忘れてはならない。森を破壊し、水を汚し、空気を汚しているのはあなたたち自身だ。まわりの開発が進み、森は年々乾いている。川の水も減った。このまま世界が暑くなり続ければ、すべての生き物の命が危機にさらされるだろう。なぜ森は苦しんでいるのか。私はそのことを、あなたたちに問いかけたい」

現状を憂い、私たちの自省を促し、そしてすべての人の連帯を呼びかけたラオーニの言葉は大きな拍手で受け止められました。

■森を守る最後の砦の先住民族保護区が、アマゾン開発推進派によっておびやかされている

ブラジル全国には505ヶ所の先住民族保護区があり、その総面積の98%がアマゾン地域に集中しています。先住民族保護区は、森を破壊から守る最後の砦のような存在です。しかしラオーニ長老が憂うように、輸食用大豆などの大規模農業開発が進むアマゾンでは、残された保護区の森すらも乾燥化や川の水の減少などの影響に苦しめられています。当団体の支援対象地のひとつ・シンガー先住民族公園を取り囲む大農場地帯では、公園内と比べて平均気温が4〜6℃も高いという観測結果も出ており、森を失う影響の深刻さが実感されます。

ところがいま、その最後の砦である先住民族の土地が、アグリビジネス業界によっておびやかされようとしています。

先住民族保護区の広大な森は、いわば最後に残された開発フォロンティアです。今年10月、開発推進派の有力な国会議員が「保護区内での大規模農業開発に道をひらきたい」と発表。大統領に対して、それを認める大統領令を出すよう迫るとともに、「開発事業を一緒にやれば、そちらにも経済的メリットがある」として、先住民族に対する働きかけを始めました。



主食のマンジョッカ(キャッサバ芋)の畑。先住民族の伝統的な焼畑農業には森を壊さない知恵がつまっている



火を入れて半年後の焼畑に木の芽が芽吹いていた。先住民族の伝統的焼畑は、こうしてじきに森が再生を始める

このような動きにラオーニ長老は「失った森は二度と戻らない。そのようなことは私は決して認めない」と緊急声明を出して先住民族全体に警告を発しました。自然と調和した持続可能な、先住民族の自立につながる経済手段を彼らと共に作り出すことが、ますます求められています。

■商品化に道をひらく「はちみつ小屋」がマチプ民族の村で完成しました！

10月下旬、シンガー先住民族公園内に位置するマチプ民族の村で、待ちに待った「はちみつ小屋」が完成しました。本格的な雨季の到来の前に完成させたいと、村じゅうが総出で建設に汗を流しました。子どもたちも瓦を運ぶお手伝いをしたそうです。

この小屋は、はちみつを搾ってビン詰めする加工場や養蜂道具の保管庫として活用されます。こうしてブラジルの食品衛生法の基準を満たす施設ができたことで、はちみつの商品化が可能になりました。今後、政府の食品認証や有機認証を取得する手続きなどを経て、来年8月に始まる次のはちみつ収穫期には、いよいよ国内各地での市販に踏み切りたいとマチプの人びとは張り切っています。

シンガー河流域の森の天然はちみつは、希少さの価値だけでなく、森と先住民族の暮らしを守るエコでエシカル(倫理的な)な価値が高いとして、市場からも大きな期待が寄せられています。まずはマチプの村を皮切りに養蜂事業は自立への一歩を踏み出します。



念願の「はちみつ小屋」の完成を祝う
マチプの人びと。村人自身の手で力を
合わせて作りあげたからこそ、喜びも
ひとしおです。来年はカラパロ民族の
村でも小屋の建築に着手します



新刊本のご案内：『抵抗と創造の森アマゾン 持続的な開発と民衆の運動』
定価2700円＋税（現代企画室 発行）

広いアマゾン地域のすべてについて各分野に詳しい10人が分担して書いた本です。全10章のうち先住民族に関する章は下郷が執筆担当しました。アマゾン先住民族がたどった歴史、自然と調和する暮らしと文化、直面する課題と問題、政治や社会の動き、また先住民族の主体的で持続可能な未来を築くための取り組みとして、当団体が支援する養蜂事業と消防団事業を紹介しています。多くの方に読んでいただけたら幸いです。本は当団体でも取り扱っています。ご希望の方はぜひどうぞ。



出る無しの深刻な問題を次世代に残さ
ないよう一人一人が行動を起す時だと思い
ます。まずは私から。そして貴方から。